

広島大学 高等教育研究開発センター 大学論集
第42集 (2010年度) 2011年3月発行：229-244

学歴社会イメージが学習意欲に与える影響

—「拡張された経済人モデル」の検討—

松 繁 寿 和 ・ 小 林 裕 幸

学歴社会イメージが学習意欲に与える影響

—「拡張された経済人モデル」の検討—

松 繁 寿 和*
小 林 裕 幸**

1. 本稿の課題

本稿の課題は、学力低下の構造を階層と関連して説明する「拡張された経済人モデル」を提示し、高等教育段階におけるその妥当性を、大学生を対象とした実際のデータから検証することである。先行研究における「経済人モデル」は学歴社会イメージという尺度を利用して学習意欲形成の構造を説明したものであったが、拡張されたモデルでは学生の学歴社会イメージと学習意欲について親の階層を考慮した上でどのような関係が有るのかを検証する。

従来学生の意欲に関する論考の多くは初等・中等教育段階の児童・生徒を分析の対象としており、高等教育段階でのデータを用いた分析は少ない。さらに、個々の児童・生徒・学生の学力形成に学習意欲が重要であることは広く認知されているものの、そうした学習意欲がどのように学歴社会イメージと関連し、形成されているかを実際のデータを用いて検証した論考は多くない。

第2節ではまず現代の学力低下論争において学業達成の仕組みを、階層と学歴社会という視点から概観する。第3節では、階層と関連した学歴社会イメージから学習意欲へとつながる構造を説明するための「拡張された経済人モデル」を提示する。第4節では本稿で利用するデータについて説明し、続く第5、6節で階層ごとの学習意欲や学歴社会イメージについて記述統計を元に分析する。最後に第7節では、計量モデルを用いて学習意欲に及ぼす学歴社会イメージの影響について分析する。

2. 問題の背景と先行研究

学業達成について人々が関心を持つのは半ば当たり前のようになっている。そうした中で学業達成は一定の尺度を持った学力の獲得であると理解されることが多い。日本において学校教育の問題を論じるときに学力について言及されることはかなり以前からあったことではあるが¹⁾、近年、特に2000年代に入ってからそれはそれまで以上に学力低下について様々な議論が交わされるようになってきている。子どもたちの学力は果たして低下しているのか、あるいは低下していないのか、そもそもここで着目している「学力」とは何を指示しているのか、など様々な諸相が見られる²⁾。ここではさしあたって「学力」について、初等中等教育段階では筆記試験によって計測される学校カリキュラム定着の度合い、高等教育段階では筆記試験やレポート等によって計測される講義等が目標とする知識や技能の習得の度合いと定めておく。

* 大阪大学大学院国際公共政策研究科教授

** 大阪大学大学院経済学研究科博士前期課程

学力に関する階層的差異に着目する教育社会学の議論の流れの中では、子どもの学習態度・意欲や学力達成は家庭の文化的環境に由来し、このような文化的環境は社会経済的な階層の指標である親の学歴や職業と相関すると考えられてきた³⁾。なぜ親の階層や文化的環境の差異が子供の学力の違い、換言すれば学力形成の源泉としての学習意欲の差異をもたらすのか。これについてはさまざまな議論があるものの、現在、子どもの生まれ育つ家庭環境や社会的出自と学業達成のレベルが強く結びついている事は一種の定説のようにになっている⁴⁾。

学力達成は学習意欲の増減に影響されるのだと仮定して、ではその社会における子供の学習意欲の増減の原因はどこにあるのだろうか。これを考える前に本稿における「学歴社会イメージ」⁵⁾の定義を述べておく。この言葉はさまざまな論考の中で利用されているが、次に述べるように堀(2004, 174頁)の「経済人モデル」を踏まえた上で考えれば、「社会において職業獲得を通じて経済的に有利な環境を求める事に学歴が有効であることを認識する」イメージという事になる。荻谷(2001, 125-142頁)は彼の大衆教育社会についての論考の中で、90年代に入ってから子供たちが学習意欲を低下させ、従来考えられてきた学歴志向性を持たなくなると論じており、また堀(2004, 174頁)は子どもの学習意欲の低下と、子どもの学歴志向の変化の関係を「経済人モデル」を用いて説明している。この「経済人モデル」とは、社会経済的なインセンティブによって学歴獲得へ向かう学習意欲を増減させる人間像というべきものである。経済的インセンティブの有無が学習意欲を左右する、すなわち経済的インセンティブによる「外発的意欲(速水, 2004, 27頁)」増減のメカニズムを備えた人間モデルということになる。このモデルでは、「学歴社会イメージ」に従って形成された経済的インセンティブによって学歴獲得への志向性の強さが学習意欲を強化する。そのため人々が、学歴獲得が自分の人生にとって(少なくとも経済的に)有利なものであるという「学歴社会イメージ」を放棄したそのとき、人々の学歴獲得へと向かう学習意欲は減退してゆくと考えられるのである。ここに子どもの学習意欲の増減の原因があるとしておく。

3. 「拡張された経済人モデル」

本稿で用いるモデルは前節までの議論を踏まえたうえで、学力達成の構造を階層と関連して説明するためのものである。ここでは、Akerlof(1983)を議論のもとにして親から子への価値観の継承という仕組みを利用する。

Akerlof(1983, p.54)は「たいていの人は自分にとっての経済的可能性の範囲内で、自分の子供のために(また、おそらくは自分自身のために)価値観を選択しようとする」と述べている。ここで彼は標準的な経済学の仮定である「すべての人は生まれながらにして利己的である」というモデルを離れ、親が子供の経済的な福利を考えて教育を施し、そのうえで子供は自分の経済的利得の最大化を行うようになるという仮定を置いている。

この考え方をもとにして親から影響を受けた子どもが学歴社会イメージを身につけ、学習意欲を変化させる構造を説明する。さらに彼は次のような仮定を置く。それは、子どもは自分の効用関数の真の形状や、社会における学歴の経済的効力や構造を当初は理解しておらず、親の教育経験に基

づく教育・指導がなければ自分の利得を減少させ、効用を低下させるような行動に出るかもしれないというものである。そのため、自分の教育経験の範囲内で社会構造についての情報を持ちなおかつ学歴社会イメージを持つ親は、子どもの効用関数の真の形状についての情報を持ち、ある程度の費用をかけてプラスになるのであれば子どもの利得・効用を最大化するような教育を行うことになる。

ただし親は必ずしも完全に学歴社会の構造を認知しているわけではなく、自分の教育経験に応じた範囲内の情報から学歴社会イメージを形成し、子どもへと伝達すると仮定する。すなわち、高学歴の親の子供はより高い学歴の獲得を目指して学習意欲を高め、それに対してそれほど高くない学歴の親を持つ子供はそれほど学習意欲を高められるわけではないという構造である。こうすることで、親はそれぞれの持つ情報と経験の範囲内で子どもの経済的福利の向上のために行動し、子どもの学歴社会イメージの形成は親の学歴階層によって規定される事になる。そして、最終的に学習意欲を高めるか否か、努力をするか否かという選択の構造を説明する「拡張された経済人モデル」が組み立てられることになる。堀（2004, 174頁）で提示された「経済人モデル」では学歴社会イメージと意欲の関係に言及したものであるのに対し、ここで提示する「拡張された経済人モデル」は親階層→学歴社会イメージ→学習意欲までを射程に収めている。

4. 利用するデータ

本稿では2010年8月にA大学のある授業で実施した「学習に対する姿勢と成果に関する学生調査」のデータを用いる。A大学は政令市に所在する大規模な私立大学で、文科・理科合わせて9学部30学科を持つ総合大学で、2009年度の学生総数はおよそ2万人である。サンプル総数は301、そのうち男性199、女性100、不明2である。所属学部学科の幅は5学部16学科である。アンケートは授業終了15分前に配布し、実施目的等を説明ののち任意に参加を求めて回収した。なお、このアンケートの末尾には成績評価には関係しない授業内容チェックの為の簡単なクイズを添付し、アンケート回収時に解答を配布した。また、アンケート調査の対象となった学生は文科の学部にも所属する学生が主体で、1, 3, 4年生がそれぞれ2割程度、2年生が3割程度となっている。まず学習意欲に関する変数は

- ・『学びの目標』：「何を目標として大学で勉強するのかわからない」
- ・『勉強の面白さ』：「大学での勉強や研究が面白い」

である。ここで、『学びの目標』は反転項目であることに注意してほしい。設問内容が「何を目標として大学で勉強するのかわからない」であるため、「1. 全くあてはまらない」と答えるほど、つまりポイントが低いほど大学での勉強の目標が明確であり、学習意欲が高いと解釈される。次に学歴社会イメージに関する変数は、

- ・『就職へ向けた勉強意識』：「大学での勉強は就職活動の際など将来の為になると思う」
- ・『進学理由』：「就職するとき有利になりそうだから今の大学を選んだ」

である。『就職へ向けた勉強意識』と『進学理由』は設問内容から、学歴社会イメージとして学歴と職業の結びつきを意識した回答と解釈できる。そのため将来の職業を意識しているために経済人モデルにおける学生の学歴社会を捉えるイメージとして利用する。そして、その他の変数は、

- ・『学年』：学年
- ・『性別ダミー』：学生の性別。男性の場合1，女性の場合0となるダミー変数
- ・『年齢』：学生の年齢
- ・『読書量の変化』：「昨年に比べて勉強や研究に関連した本を読む時間が増えた」
- ・『平均登校日数』：平均的な一週間の登校日数
- ・『勉強時間』：講義・実験・演習の準備のために使う一日の平均的な勉強時間
- ・『講義への興味・関心』：「この授業を受ける以前から，この授業で取り扱っているテーマ・内容に興味・関心があった」
- ・『成績自己評価』：「現在の自分の成績は」
- ・『父教育年数』：父親の教育年数
- ・『母教育年数』：母親の教育年数
- ・『学歴社会イメージ』：『就職へ向けた勉強の意識』と『進学理由』を加算して合成した変数⁶⁾である⁷⁾。『成績自己評価』は「1. 良いほうだと思う」から「4. あまり良くないほうだと思う」までの4段階数値である。『学歴社会イメージ』は5段階の二つの変数を合成しているため，2~10の数値をとる。それ以外の変数は「1. 全くあてはまらない」から「5. 非常にあてはまる」までの5段階数値である。

5. 学習意欲と学歴社会イメージの関連

表1と表2はそれぞれ『学びの目標』，『勉強の面白さ』と，各種変数について二変数間の相関を見たものである。左端にサンプル全体での相関係数を，右側には父母の学歴でサンプルをグループ分けした際の相関係数を記載している。まず表1の『学びの目標』について左側の全体での相関係数を見ると，『読書量の変化』，『学歴社会イメージ』，『講義への興味・関心』，『母教育年数』，『勉強時間』，『父教育年数』などの順に負の相関がある。この中で学歴社会イメージについての変数は比較的負の相関が大きく，学歴社会イメージの強化は同時に学ぶ目標の明確化を伴うと言える。

表1 『学びの目標』と各種変数の相関関係

	全体	父大卒層	父非大卒層	母大卒層	母非大卒層
年齢	-0.041	-0.030	-0.056	-0.096	-0.025
性別ダミー	0.001	0.000	0.016	0.041	0.006
学歴社会イメージ	-0.188 ***	-0.261 ***	-0.085	-0.202	-0.183 ***
成績自己評価	0.166 ***	0.182 **	0.150	0.298	0.145 **
講義への興味・関心	-0.126 **	-0.174 **	-0.047	-0.092	-0.128
父教育年数	-0.026	0.131	-0.135	0.294 **	-0.063
母教育年数	-0.073	-0.043	-0.127 *	0.143	-0.078
読書量の変化	-0.196 ***	-0.210 **	-0.173 *	-0.195	-0.191 ***
登校日数	-0.083 *	-0.073	-0.093	0.112	-0.123 *
勉強時間	-0.065	-0.135 **	0.024	-0.054	-0.070

*10%，**5%，***1%

『学びの目標』と負の相関のある変数のうち『勉強時間』については相関係数の絶対値が小さく、相関が比較的弱いことがわかる。これを父母大卒・非大卒でグループ分けをした上で『学びの目標』とその他の変数の相関係数を計算してみたときも、概ね同様の傾向が確認できる。また、『学歴社会イメージ』についてみると、父親と母親の両方で大卒層の相関係数が非大卒層のものよりも大きいことがわかる。

次に変数『勉強の面白さ』の全体について表2の左側をみると、学歴社会イメージの変数『学歴社会イメージ』、『読書量の変化』、『講義への興味・関心』、『登校日数』などの順に正の相関がある。ここでは学歴社会イメージを表す変数『学歴社会イメージ』が変数『勉強の面白さ』と最も相関関係が強いことが示され、逆に『勉強時間』は『勉強の面白さ』と正の相関のある変数の中で最も相関関係が弱いということがわかる。

表2 『勉強の面白さ』と各種変数の相関関係

	全体	父大卒層	父非大卒層	母大卒層	母非大卒層
年齢	-0.137	-0.150 *	-0.120	-0.039	-0.166 **
性別ダミー	-0.118 ***	-0.111	-0.159	-0.048	-0.161 **
学歴社会イメージ	0.323 ***	0.373 ***	0.256 ***	0.266 **	0.332 ***
成績自己評価	-0.085 *	-0.148 *	-0.008	-0.206	-0.069
講義への興味・関心	0.205 ***	0.146 **	0.286 ***	0.210	0.191 ***
父教育年数	0.063	0.005	0.134	0.110	0.020
母教育年数	0.091	0.143	0.010	0.129	0.046
読書量の変化	0.270 ***	0.216 ***	0.355 ***	0.229	0.273 ***
登校日数	0.203 ***	0.281 ***	0.085	0.087	0.215 **
勉強時間	0.052	0.028	0.086	-0.088	0.072

*10%, **5%, ***1%

以上、学習意欲に関する『学びの目標』と『勉強の面白さ』と、『学歴社会イメージ』およびその他の変数の相関関係を見て読み取れることは次のようなことである。(1)学歴社会イメージは意欲と比較的強い相関関係にあり、学歴社会イメージの強弱が学習意欲を左右する可能性がある。(2)学習意欲と勉強時間の間にはあまり強い相関関係がなく、意欲の強弱が勉強時間を左右するとは言い難い。(3)少なくとも『学びの目標』で表された学習意欲に関しては、親非大卒層よりも親大卒層の方が学歴社会イメージとの相関が強く、親学歴によって形成される学歴社会イメージから学習意欲の形成について、階層差があると考えられる。

6. 学歴社会イメージの分布ごとの学習意欲

次に親学歴で大卒層と非大卒層にグループ分けした際に、『学歴社会イメージ』の分布がどのように変化するのかをみる。まず表3の左側「全体」にサンプル全体での『学歴社会イメージ』の分布を示す。数字は百分率で表したものである。なお、『学歴社会イメージ』は5段階数値の変数を二つ足し合わせて合成した変数であるため、最小値は2である。表3の右側「父大卒層」「父非大卒層」「母大卒層」「母非大卒層」は父母の学歴を大卒と非大卒に分けたときの『学歴社会イメージ』の割合である。

表3 各階層ごとの学歴社会イメージの分布

学歴社会イメージ尺度	全体	父大卒層	父非大卒層	母大卒層	母非大卒層
2	3.01	2.74	0.89	2.33	1.85
3	4.35	4.11	4.46	2.33	4.63
4	10.03	8.9	10.71	4.65	10.65
5	14.05	15.75	12.5	16.28	13.89
6	25.08	23.97	25.89	16.28	27.31
7	17.06	15.07	20.54	25.58	14.81
8	18.39	21.92	16.07	23.26	18.52
9	5.69	5.48	5.36	6.98	5.56
10	2.34	2.05	3.57	2.33	2.78

父母の大卒・非大卒で分けた四つのグループすべてにおいてみられる傾向としては、概ね中央の6を最頻値として左右に均等に分布している様子が見られる。また、大卒・非大卒のグループに分けて平均値の差の検定と等分散性検定を行った結果、両グループの間に有意な差異は無かった。したがって統計的な分析の結果からは、学歴で分けた親階層による学歴社会イメージの差異は見られないということになる。

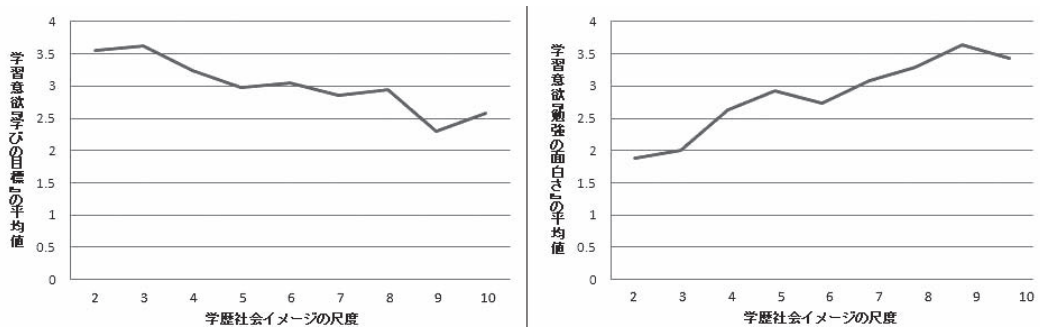


図1 学歴社会イメージ尺度ごとにみた全サンプルにおける学習意欲の平均値

続いてこの学歴社会イメージに対する解答によって学習意欲が平均的にどの程度異なるのかをみる。図1は横軸に学歴社会イメージの尺度をとり、縦軸に学歴社会イメージの尺度ごとに学習意欲の変数の平均値をとって折れ線グラフで表したものである。図2と図3の縦軸と横軸も同様である。まず全体的な傾向を把握するために親の学歴ごとに分けずに図1左側の学習意欲を表す『学びの目標』⁸⁾についてみると、概ね右下がりの傾向が確認できる。ここから学歴社会イメージが強いほど学習上の目標がより明確になるという関係が読み取れる。また図1右側の変数『勉強の面白さ』から全体的な傾向をみてみると、『学びの目標』とは逆に右上がりになっている。ここから学歴社会イメージが強くなるほど大学での勉強や研究がより面白いと感じるという関係が見て取れる。さらに、図2と図3に示したように父親大卒・非大卒、母親大卒・非大卒にサンプルを分けて同様の操作を行った結果、おおむね同様の傾向が見られた⁹⁾。

以上の結果は、父親学歴と母親学歴をそれぞれ大卒と非大卒に分けても共通に学歴社会イメージの強さが学習意欲を左右している可能性が示唆され、引いてはどのような階層の親を持つ子供であっても経済人モデルが成立する可能性を示している。

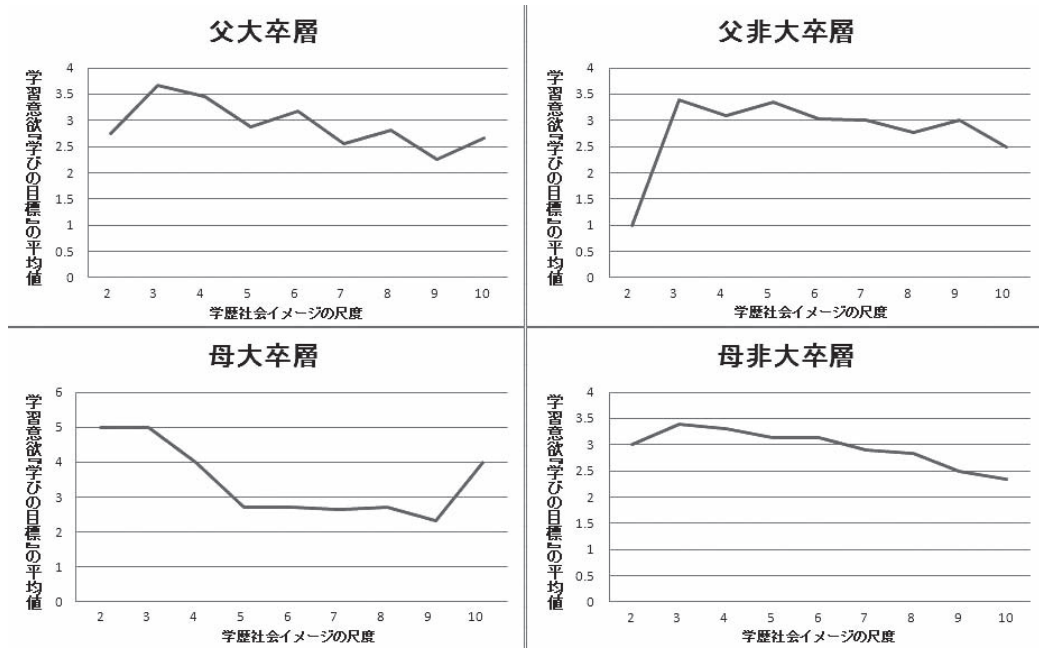


図2 学歴社会イメージ尺度ごとにみた学習意欲『学びの目標』の平均値

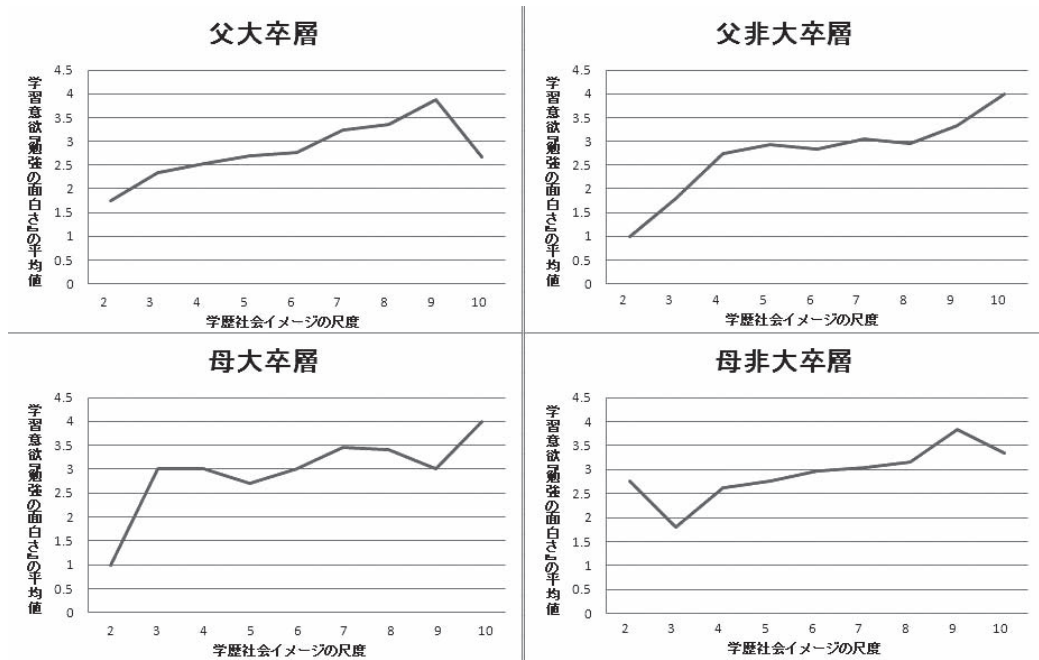


図3 学歴社会イメージ尺度ごとにみた学習意欲変数『勉強の面白さ』の平均値

7. 学習意欲の規定要因分析

ここまでの学歴社会イメージと学習意欲についての記述統計を基にした分析から、親の階層による差異を示しつつも共通して学歴社会イメージが学習意欲に対して及ぼす影響の構造、すなわち「拡張された経済人モデル」の構造の成立が見込まれることになった。そのため最後に、学歴社会イメージから学習意欲への影響を他の要因をコントロールした上でより詳細に分析する。

ここでは学習意欲を表す『学びの目標』、『勉強の面白さ』が共に5段階の離散変数であるということに留意して計量モデルとして順序プロビットモデルを用いて分析する。モデルの被説明変数は学習意欲を表す『学びの目標』と『勉強の面白さ』であり、説明変数は『学歴社会イメージ』を含む次の各種変数である。それらは『年齢』、『性別ダミー』、『学歴社会イメージ』、『成績自己評価』、『講義への興味・関心』、『父教育年数』、『母教育年数』、『読書量の変化』、『登校日数』である。

繰り返しになるが、表1と表2では学習意欲の『学びの目標』、『勉強の面白さ』と学歴社会イメージの変数『学歴社会イメージ』の単純な相関関係が示されていただけであるが、ここではその他の変数も同時にコントロールしたうえで、順序を伴う離散変数としての『学びの目標』、『勉強の面白さ』に学歴社会イメージ変数がどのような影響を与えるのかを分析する。また、サンプル全体を対象とした分析と合わせて親学歴階層ごとにサンプルをグループ分けした分析も行い、どのような階層で経済人モデルが成り立つのか、あるいは成り立たないのかを分析する。なお、推定式の中の説明変数は掲載の通り、9種類である。

表4 学習意欲として『学びの目標』を用いた規定要因分析

説明変数	全体		父大卒層		父非大卒層		母大卒層		母非大卒層	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
年齢	-0.061	0.065	-0.046	0.090	-0.041	0.100	-0.011	0.152	-0.093	0.074
性別ダミー	-0.030	0.148	-0.068	0.202	0.002	0.225	-0.138	0.421	-0.055	0.163
学歴社会イメージ	-0.115	0.042 ***	-0.165	0.057 ***	-0.057	0.065	-0.221	0.120 *	-0.114	0.046 **
成績自己評価	0.230	0.097 **	0.232	0.132 *	0.241	0.147	0.540	0.311 *	0.174	0.104 *
講義への興味・関心	-0.025	0.069	-0.083	0.089	0.069	0.112	0.105	0.181	-0.047	0.075
父教育年数	-0.019	0.036	0.449	0.351	-0.084	0.085	0.106	0.133	-0.036	0.038
母教育年数	-0.020	0.048	0.011	0.063	-0.069	0.080	0.219	0.681	-0.055	0.071
読書量の変化	-0.149	0.063 **	-0.133	0.085	-0.175	0.098 *	-0.303	0.167 *	-0.141	0.070 **
登校日数	-0.112	0.094	-0.087	0.139	-0.162	0.135	0.221	0.251	-0.211	0.107 **
サンプル数	233		133		100		38		195	

*10%, **5%, ***1%

表5 学習意欲として『勉強の面白さ』を用いた規定要因分析

説明変数	全体		父大卒層		父非大卒層		母大卒層		母非大卒層	
	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差	係数	標準誤差
年齢	-0.069	0.065	-0.027	0.09	-0.103	0.101	-0.103	0.15	-0.05	0.074
性別ダミー	-0.300	0.150 **	-0.211	0.203	-0.508	0.232 **	-0.161	0.41	-0.293	0.165 *
学歴社会イメージ	0.161	0.042 ***	0.198	0.057 ***	0.097	0.066	0.187	0.113 *	0.164	0.047 ***
成績自己評価	-0.086	0.097	-0.164	0.131	0.026	0.148	-0.580	0.302 *	-0.026	0.105
講義への興味・関心	0.132	0.069 *	0.076	0.089	0.261	0.116 **	0.096	0.176	0.140	0.077 *
父教育年数	0.051	0.036	-0.166	0.342	0.124	0.086	0.216	0.133	0.042	0.039
母教育年数	0.030	0.048	0.043	0.063	0	0.08	-0.023	0.644	0.037	0.071
読書量の変化	0.231	0.064 ***	0.156	0.086 *	0.359	0.103 ***	0.306	0.163 *	0.235	0.072 ***
登校日数	0.162	0.095	0.279	0.140 **	0.017	0.135	0.045	0.247	0.216	0.107 **
サンプル数	233		133		100		38		195	

*10%, **5%, ***1%

表4は被説明変数としての学習意欲の変数を『学びの目標』にし、順序プロビットモデルとして推定した結果であり、表5は被説明変数を『勉強の面白さ』とした時の推定結果である。まず表4の非説明変数が『学びの目標』のケースについてみる。表4左側「全体」の項目はサンプルを全体とした分析の結果であり、学歴社会イメージ変数の『学歴社会イメージ』は負の係数で推定結果は有意なものとなっている。このため、学歴社会イメージの強化は学ぶ目標を明確化することになる。表4右側はグループを父母の学歴ごとに分類した時の推定結果である。学歴社会イメージについて父親学歴ごとにサンプルを分けた場合、「父非大卒層」では有意な結果とはなっていない。しかし、母親学歴ごとに分けた場合は大卒層・非大卒層の両方で学歴社会イメージは有意に学習意欲の向上に寄与している。次に表5の非説明変数が『勉強の面白さ』のケースについてみる。「全体」の項目では学歴社会イメージは正の係数で有意となっている。このため、学歴社会イメージの強化は大学での学びや研究で表された学習意欲の向上に寄与していると考えられる。父母の学歴ごとにサンプルを分けて推定した結果、『学びの目標』のときと同様に父非大卒層でのみ学歴社会イメージが有意ではなかった。また、変数『学歴社会イメージ』について推定された係数をみみると、『学びの目標』では母非大卒層 -0.114に対して母大卒層では -0.221となっており、これは学歴社会イメージの尺度が1上がった時に学習意欲の向上に与える影響が母大卒層のほうがより大きいことを示している。変数『勉強の面白さ』でも母非大卒層0.164に対して母大卒層0.187となっており、学歴社会イメージの効果は母大卒層ではより強いという結果が得られた。

以上の分析の結果をまとめると次のようになる。(1)『学びの目標』と『勉強の面白さ』の両方で、サンプル全体において学歴社会イメージの強化は学習意欲の向上に寄与している。また、親学歴ごとのサンプルを分けた場合、父親非大卒層以外でも同様の結果が得られた。(2) サンプルを母親の学歴で分けた場合、学歴社会イメージが学習意欲に与える影響は大卒層のほうが非大卒層よりも大きい。

8. 結論と今後の課題

第6節では大卒・非大卒両者の父母学歴階層で、学歴社会イメージが高ければ平均的な学習意欲が高いことが確認された。また第7節ではサンプル全体で学歴社会イメージは学習意欲に対して正の効果を与えることが示された。さらに母学歴で階層別に分けた分析では非大卒層よりも大卒層の学歴社会イメージの学習意欲への影響が強いことが確認された。ここから「拡張された経済人モデル」の妥当性について考察すると、階層による程度の違いを示しつつ学歴社会イメージとして学歴ないしは学習と職業の結びつきを意識した上で学習意欲が高められるという結果になり、これは経済的インセンティブに基づいて学習意欲を増大させる「拡張された経済人モデル」の構造を支持することを意味する。この結果によって、職業獲得への有効性という側面から学歴を見つめる大学生という実態があぶりだされ、階層別に見たとき学生の学歴社会イメージは学習意欲への影響の強弱を親学歴によって変化させることが明らかになった。これは経済人モデルが全体的に成立する可能性を示すものであり、計量分析は少なくとも母親の学歴で階層に分けた場合には、学歴社会イメージが学習意欲に与える影響に差が生じる可能性を示している。サンプル全体、すなわち高等教育段階にいる学生全体にこの経済人モデルが当てはまるということは、現代の大学生の学歴社会イメージが彼らの学習意欲の形成に一定の位置を占めていることを示すものである。

さて、今後の課題としては次のようなことがあげられる。(1)各種の変数を取るための設問を改良し、調査者が意図したとおりの回答が得られるような正確な情報収集を行うこと。(2)定義に則った学力を計測するために有効な学力テストを実施することで、学習意欲と学力テストのスコアを結び付けて分析し、今回用いたモデルが具体的な学業達成にどの程度影響を与えているのかを分析すること。所属する階層によって学歴社会イメージが学習意欲に対して与える影響の構造実証のためには以上の二つを念頭に置いた調査の実施とさらに精密な分析が望まれる。

【謝辞】

本稿で利用したデータ収集に際しまして、九州大学高等教育開発推進センターの副島雄児教授にご協力とご指導を戴きました。また、本稿で利用したアンケート収集に際して多くの学生の方にご理解とご協力をいただきました。記して御礼を申し上げます。

【注】

- 1) 金馬（2004）は1950年前後におきたいわゆる戦後新教育への批判の中の学力低下問題への再検討を行っており、この時期の学力低下論争について概観できる。また、荻谷（2002, 88-95頁）は1949年に日教組が実施した調査の結果を引きながら、子どもの学習時間減少と学力低下にかかわる問題意識が当時においても社会階層と結びついたものであったことを紹介している。
- 2) それぞれの議論に対する評価はさておきとして、子安（2002）にはこうした議論がレビューさ

れている。

- 3) 諸田 (2003) では、学習意欲、学習行動、学習の成果としての学力テストスコアの平均値が文化的階層によって異なることが示されている。また、荻谷 (2001) では調査年度の異なるデータを比較して学力低下や学習意欲・学習時間低下の仕方に階層差があることが示されている。
- 4) このことについて例えば大前 (2002, 179頁) は「教育システムが、家庭の保有している様々な種類の資本を、学歴資本へ、さらにはキャッチアップ文化資本へと向かわせる変換装置になっている」という仮説を提唱し、親の持つ教育経験、すなわち親学歴がその子供にとっての学歴の意味と人生における効力の範囲を決定している可能性があることを示唆している。この中で、「キャッチアップ文化資本」とは「その当時の先進的な文化事象を取り入れる事によって成立」するような「日本に特徴的な文化資本の形態」と定義されている (大前, 2002, 174-175頁)。
- 5) 堀 (2004, 175-178頁) では学歴の意味として「消費」と「投資」の二つの側面を考慮したうえで、「経済人モデル」を前提とした学歴に「経済人モデルに内蔵された外発的意欲の<装置>そのもの」という解釈を与えている。
- 6) 変数『学歴社会イメージ』を構成する二つの変数について主成分分析を実施したところ、第1主成分の Proportion は59.1%、『就職へ向けた勉強の意識』と『進学理由』に掛かる係数が同じ値であった。このため、学歴社会イメージ尺ごとの平均的な意欲についてみるためにあえてこの結果を使わずに単純加算した合成変数を本稿では利用した。
- 7) 利用した変数についての基本統計量を以下に示す。ただし、サンプルは全体のうち順序プロビットモデルの推定に用いたものに限定している。

変数	平均	標準誤差	最小値	最大値
学びの目標	2.978	1.174	1	5
勉強の面白さ	2.939	1.049	1	5
年齢	20.026	1.258	18	23
性別ダミー	0.632	0.483	0	1
学歴社会イメージ	6.329	1.780	2	10
成績自己評価	3.329	0.743	1	4
講義への興味・関心	2.887	1.094	1	5
父教育年数	14.355	2.166	9	18
母教育年数	13.281	1.627	9	18
読書量の変化	2.671	1.196	1	5
登校日数	4.610	0.842	2	7
勉強時間	41.667	65.309	0	450

- 8) この変数は反転項目であることに注意。
- 9) ただし、グループによっては学歴社会イメージの尺度の両端のサンプル数が極端に少ないためにばらつきがみられた。例えば図2の『学びの意欲』：父非大卒層の学歴社会イメージの尺度と学習意欲の平均値のグラフで、全体として右下がりの傾向を示しながらも左端が大きく下がっているのは、学歴社会イメージの尺度のポイントが2であるようなサンプルが一つしかなく、その値が極端に低かったためである。

【引用・参考文献】

- 天野郁夫（1983）「教育の地位表示機能について」『教育社会学研究』第38集，44-49頁。
- 大前敦巳（2002）「キャッチアップ文化資本による再生産戦略—日本型学歴社会における『文化的再生産』論の展開可能性—」『教育社会学研究』第70集，165-184頁。
- 荻谷剛彦（2001）『階層化日本と教育危機』有信堂。
- 荻谷剛彦（2002）『教育改革の幻想』筑摩書房。
- 金馬国晴（2004）「戦後初期に『学力』の『低下』が意味したこと—〈学力調査〉から戦後新教育の批判へ—」荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店，237-265頁。
- 子安潤（2002）「学力低下論の諸相」『愛知教育大学教育実践総合センター紀要』第5号，17-24頁。
- 須藤康介（2010）「学力の階層差に関する実証研究の動向：日本とアメリカの比較を通して」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第49巻，53-61頁。
- 速水俊彦（2004）「学ぶ人を意欲づける知」梶田正巳編『授業の知—学校と大学の教育革新』有斐閣，23-41頁。
- 堀健志（2004）「ポスト学歴社会における学習意欲と進学意欲」荻谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学』岩波書店，173-195頁。
- 諸田裕子（2003）「学習意欲・学習行動・学力の階層格差（第2章 教育の階層差をいかに克服するか）」『学校臨床研究』第2巻2号，26-29頁。
- 矢野真和（1980）「学歴主義の構造と転換」山村健・天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣，208-236頁。
- Akerlof, G. (1983). Loyalty Filters. *American Economic Review*, 73, 54-63.

Meritocratic Imaging and Motivation for Study: an augmented model

Hisakazu MATSUSHIGE *

Hiroyuki KOBAYASHI **

The purpose of this article is to propose a model that explains school achievement with reference to indicators of motivation and social status, and to evaluate its ability to predict the subjects' later accomplishments as university students. The Homo-economicus model used in previous studies relates motivation for study to measure of the subjects' meritocratic imaging. We will augment this model by also including the social status of the subjects' parents.

Previous studies along these lines have typically used data at the elementary or secondary education level, and not at the university level. It is well-known that individuals' motivation for study is important to their school achievement, but few empirical studies have explored this topic. The data we use for our analysis consists of a survey taken in a lecture for students of social and human science schools, in 2010. The data set is comprised of more than 300 samples and includes answers to 23 questions about students' knowledge, their attitude towards school life, and their parents' academic background.

Correlation coefficient analysis relating motivations for study and imaging of Gakureki-shakai yields the following results. First, the imaging and motivation are strongly correlated, and it is possible that the strength of the image controls the strength of the motivation. Second, it is difficult to say that the motivation has much influence on study time of students. Third, as shown by responses to the survey question "Do you have an objective for study?", there is stronger correlation between motivation and imaging for subjects whose parents are university graduates than for others. And there is a difference in motivation according to parents' academic background.

Analysis of motivation for study and indicators of Gakureki-shakai imaging leads to the following results. The strength of the image certainly has influence on the motivation for study regardless of parents' academic background, which supports the Homo-economicus framework. Ordered probit model analysis shows that the image has a positive effect on motivation that is statistically significant at the 1% confidence level. Moreover, the same results is attained within each group, significant at the 10% confidence level, except for the group whose fathers are not university graduates.

In conclusion the overall results are these. First, high image level of Gakureki-shakai leads to high motivation for study, and this effect remains strong when an ordered probit specification is used to control for other variables. Second, by dividing the sample into two groups, the effect of meritocratic imaging on

* Professor, Osaka School of International Public Policy, Osaka University

** Master course student, Graduate School of Economics, Osaka University

motivation is stronger in the group of students whose mothers are university graduates than in the other group. From these results, students' motivation for study is affected by their meritocratic imaging according to their parents' academic status. We conclude that today's university students' motivation for study reflects their meritocratic imaging conditioned by their parents' academic background.